

# ラストイピンク

## 敗北洗脳



ここは「輝楽ヶ丘」  
人々は日々平穏な日常を送っていた。  
「きゃー!」

しかし人知れず街の平和を脅かそうとする者が存在する  
「さあ、観念するんだ!」

彼らは悪の組織バッドクロス。

少女達を襲いエネルギーを奪い、時には少女達を捕獲し  
戦闘員へと洗脳したりし街の平和を脅かしている

「そこ」までよ!」

しかしそんな存在から街の平和を守る戦士が居た

「ぼく達が相手だ!」



悪事を働くバッドクロスの前に立ちはだがる2人の少女

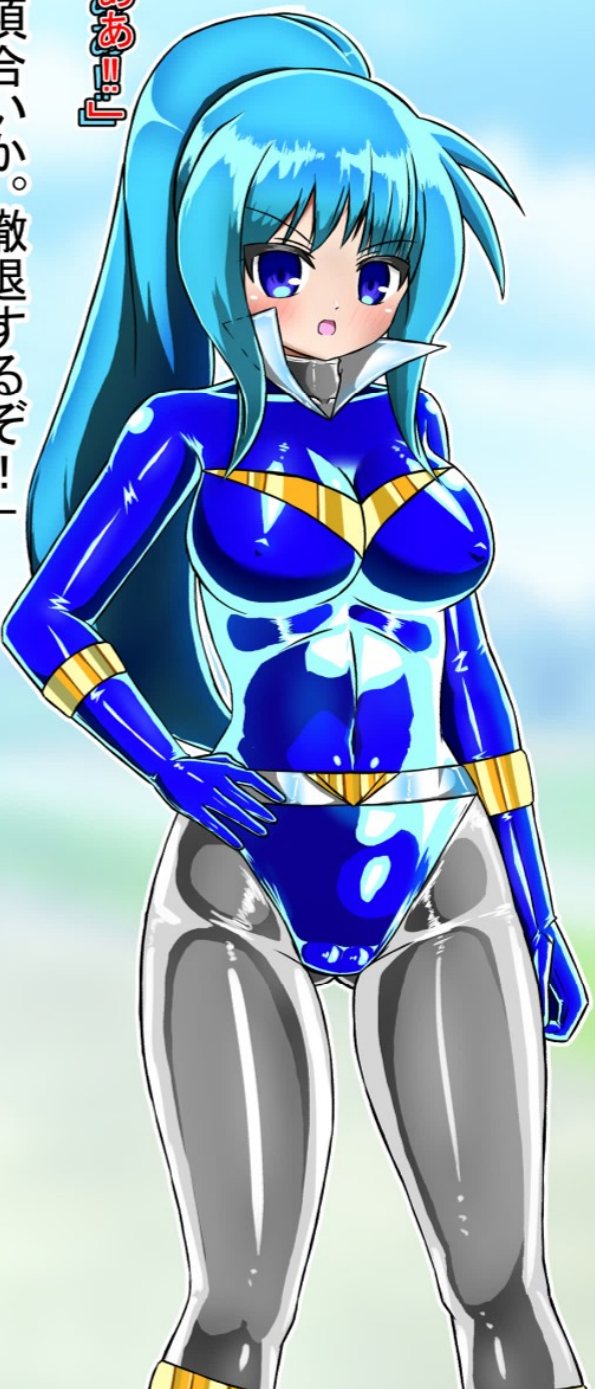


「赤き輝姫ラストイレッド!!」れ以上の悪さはぼく達が許さない!!」

そして…

「青き輝姫ラストイブルー!!わあなた達の好きにはさせないわ!!」

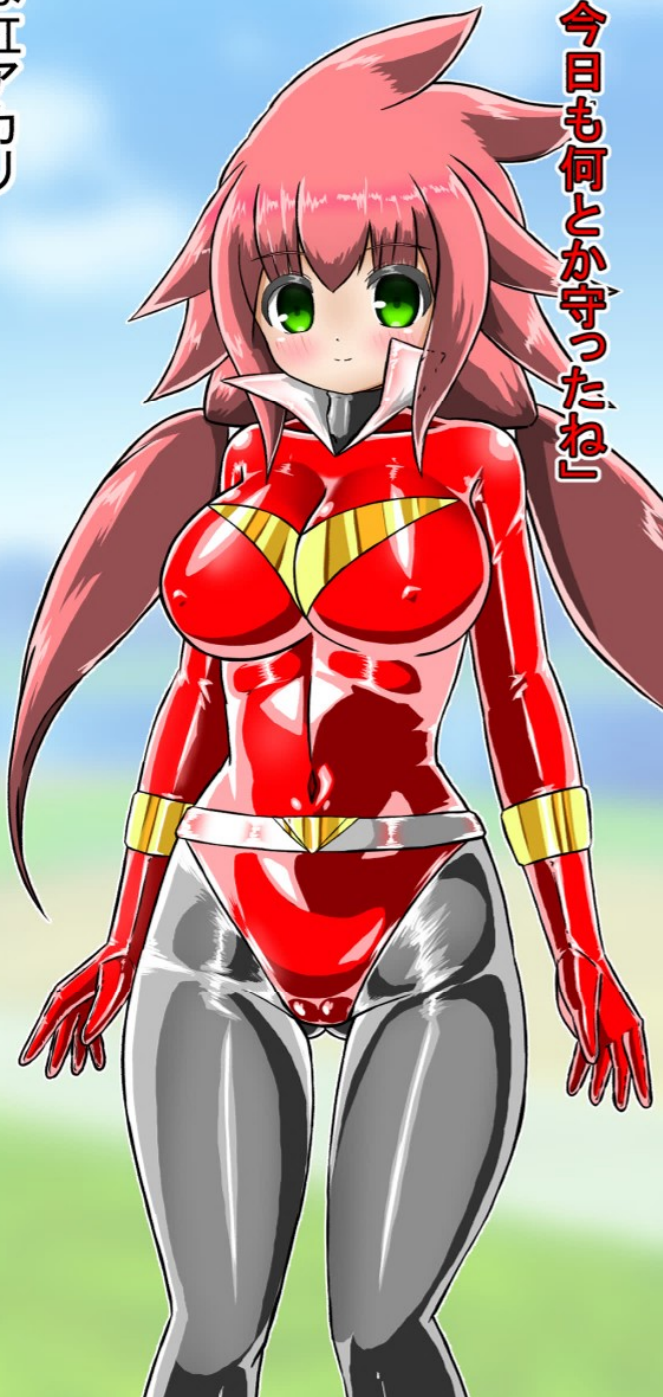
彼女達は輝楽ヶ丘を守るため力を手に入れた輝姫の戦士。  
ラストイレッドとラストイブルーである



「はあああ!!」

「くっ、頃合いか。撤退するぞ!!」

「さう、今日も何とか守ったね」



彼女は紅アカリ  
ちよっぴり恥ずかしがり屋で子供っぽさが残るが  
街の為に戦う心優しい少女

「そうね、お疲れ様」

彼女は蒼真アオイ。真面目で正義感が強く  
バッドクロスが街に現れる前から戦士として戦って居た少女



街を守る戦士として戦う彼女達だが普段は輝楽ヶ丘学園に通う  
普通の少女達だが、日々平和を守る為戦い続けるのだった。

「いや！」  
「誰か助けて！」

「無駄だ、誰も助けに来ない！」  
(別の部隊のラスティレッド達の揺動は上手く行っているようだな)

「うっ、どうしよう……」の人達って悪の組織？

「お前もだ、こっち来るんだ！」  
「いや……やめてください……」



第一章 桜木毛毛



彼女の名は桜木モモ、輝楽ヶ丘学園に通う少女。  
普段は大人しく引っ込み思案な女の子。平和に暮して居るはずの彼女だが  
目の前で起っている出来事に恐怖は勿論だがそれ以外の感情を抱いていた



（いつも見る夢みたい……だけど夢じゃ無い……  
悪の組織とかって本当にあったんだ……じゃあもしかして……）

何かを思い出そうとする彼女だが悪の組織バッドクロスを前に  
何も出来ず彼らに連れ去られようとしていた

「大人しくこいつを見るんだ！」

「は、離して！」

戦闘員が捕らえた少女を無理矢理、設置されたモニターの前へと連れて行く。

「催眠洗脳モニター、起動！」

キーン。



「あぁっ……」

「動け無い……」

先程まで蹴き抵抗して居た少女達が力が抜けたかの様にモニターを見つめ大人しくなっていく

「はぁ、はぁっ……あうっ……」

（何……」の映像……目が離せない……くらくらする……それに身体が……熱い……）

モニターを見つめるモモや少女達の息遣いが徐々に荒くなっていく。「どうだ？」のモニターは見た者の性欲を高めつつ催眠状態へと堕とす代物だ！見つめるだけで心地良いだらう？」





「わたし……どうなっちゃうのかな……」

モモも同様にモニターを見つめ続け薄れ行く意識の中  
夢の中で見た事を思い出す

「そう言えば夢の中でも「んな風に悪者に襲われた事があつたっけ……」

「お前のエネルギーを頂くタ……」

「い、いや……」

「でもあの時は……」

「その娘を離して……」

「正義の味方が助けてくれたんだ。また助けに来てくれ無いか……」



過去にも何者かに襲われ、自身を助けてくれた戦士の存在を  
思い出そうとするが…

キイイイン…

(でもあれはやっぱり夢なのかな…)



「はあ、はあ、はあ………♥」

「これでお前達は我々バッドクロスのものだ！我々に従え！」

「はい……♥」

「従う……♥」

「わたしは……バッドクロスのもの……」

「よし、上手く行ったようだ。それじゃあ「いつら」を  
アジトへ連れて行くぞ。転送装置起動！」  
洗脳催眠モニターの影響ですっかり従順な態度を取る少女達は  
何の抵抗もせずバッドクロスのアジトへと連れて行かれたのだった。



第2章 最下級戦闘員



「さあ、ここが我々バッドクロスの拠点となるアジトだ。そして私はこの組織の科学者であるドクタービグルだ」  
「Yes...」



バッドクロスに捕まりいきなりアジトへと連れてこられた  
モモ達だが催眠状態で思考が追いつかない彼女達にビグルは話し続ける。  
「お前達はこれから我々バッドクロスの所有物となるのだ。  
「いつらの様にな」

すると奥からハイレグで足は露出し身体に張り付く様に密着し乳頭部は僅かに尖り光沢のあるボディスーツを身につけた少女達が現れる

「はっ、はっ……うう、いや……」

「あんな恰好するの……」

目の前に現れた羞恥的な恰好の少女達を目にし、自らもあんな恰好をしなくてはいけないのかと催眠状態から解けつつある少女達は羞恥し顔を赤らめる

「はあ、はあ……。わたしもあんな恥ずかしい恰好しなきゃいけないの……？」

しかし中には先程の洗脳催眠モニターの影響で性欲を高められ興奮するかの様に息遣いを荒くしモモも他の少女達と同様に羞恥的な姿になる事への期待感を募らせる



「まだ本格的な洗脳処置を受けていない貴様らを実験台にし最下級戦闘員用のスーツのテストを行う！貴様らの方が純粹に機能のテストを測りやすいからな」

（テスト……何をやる気なの……？）



キーン。

羞恥心と性欲を募らせながら、これから自身の行方に不安を感じるモモ達

「貴様らに拒否権など無い！コイツを見るのだ！」

「ああっ！また……」



モモ達の不安そうな素振りなど構わず戦闘員は再び催眠洗脳モニターを使用し、彼女達の自由を奪い支配する。

「くくく……命令は絶対だ！スーツに着替える！」

「身体が勝手に……」

「うう、いや……。でも……命令は絶対……」

少女達は羞恥を感じながらも催眠には逆らえず男性であるビグルの  
見ている前で服を脱ぎ出す。





「うっ、はぁ、はぁ」

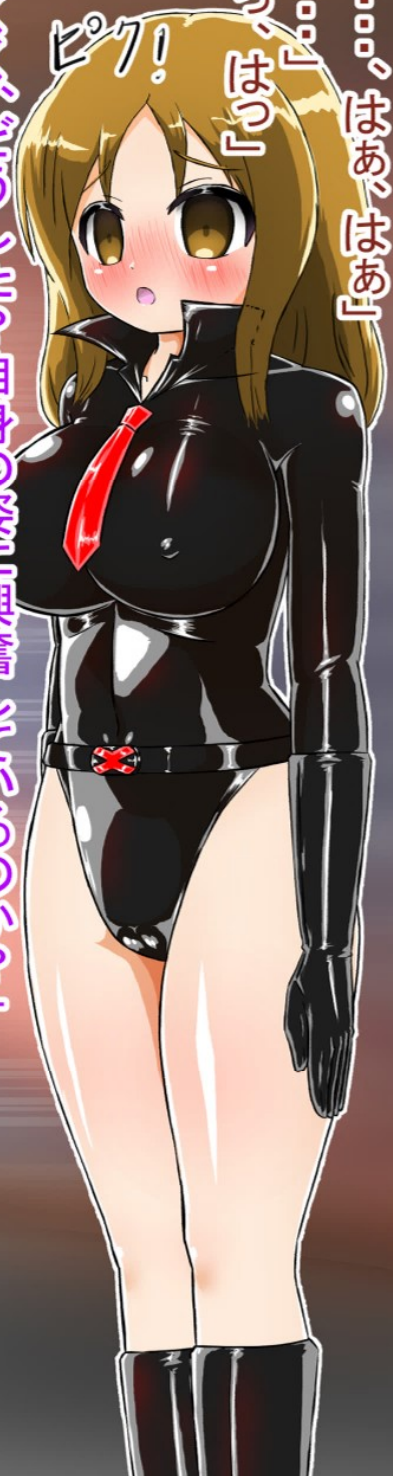
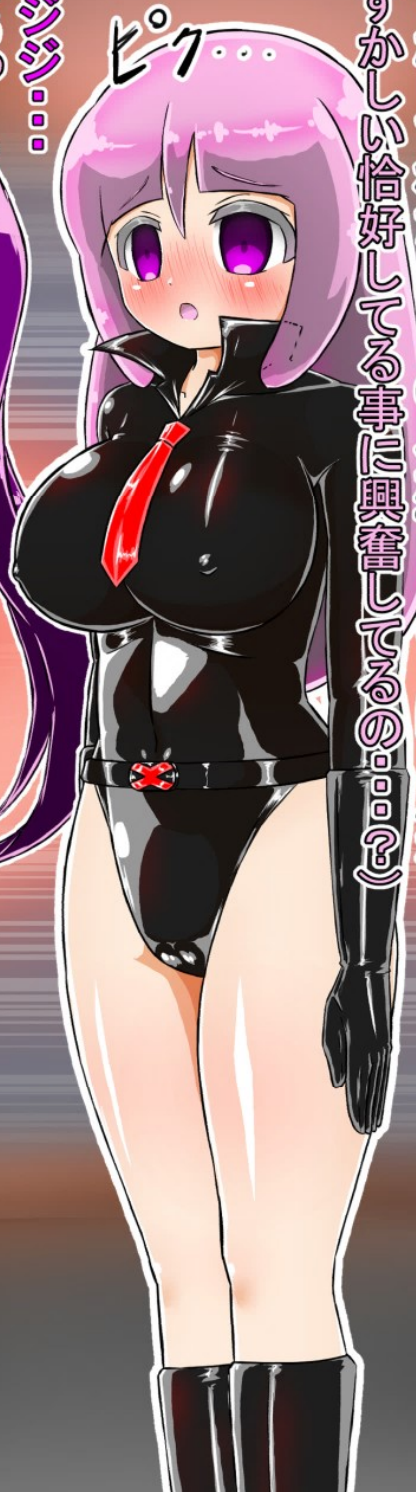
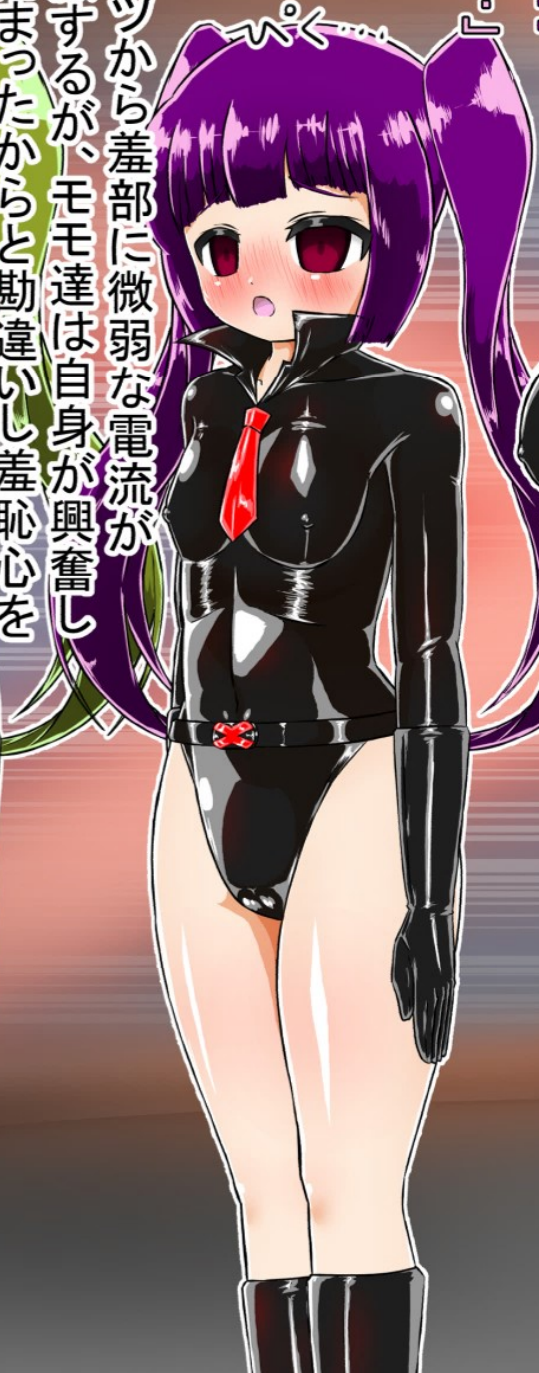
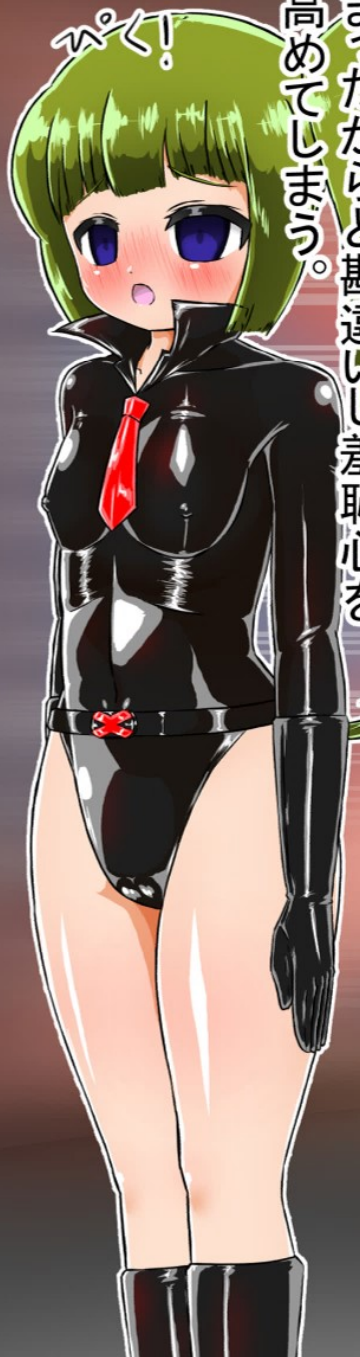
「はっ、はっ」

「くくく、どうした？自身の姿に興奮しているのか？」  
「ふむ、スーツに組み込んだ装置が上手く  
作動出来ている様だ」

「はぁ、はぁ……」  
「この服を着てから乳首と股間が何だか熱い……  
もしかしてわたし、この人が言うように「こんな  
恥ずかしい恰好してる事に興奮してるの……？」

「うっっっ……」  
「うっっっ……」

「一瞬スーツから羞部に微弱な電流が  
流れ刺激するが、モモ達は自身が興奮し  
性感が高まったからと勘違いし羞恥心を  
より一層高めてしまっ」



第3章 羞恥の歩行訓練



「さあ、入れ」

モモ達はビグルの言われるまま長く幅の広い廊下の様な場所に連れて来られた。



「今日は貴様らにはそのスーツに慣れて貰うために歩行訓練を行ってもらおう。」



ビグルは別の部屋に移りスピーカーを通して彼女達に話し始める。

「私は「ニ」から見張っているからしっかり訓練に励むのだ！」

「はい、ビグル様……」

「それでは始め！」

「はいーっ」

ビグルの声が響き渡りモモ達は一斉に歩き始める。

「んっ……」  
足を踏み出した瞬間股間に食い込む様に  
スーツが締め付け、快感が走る。



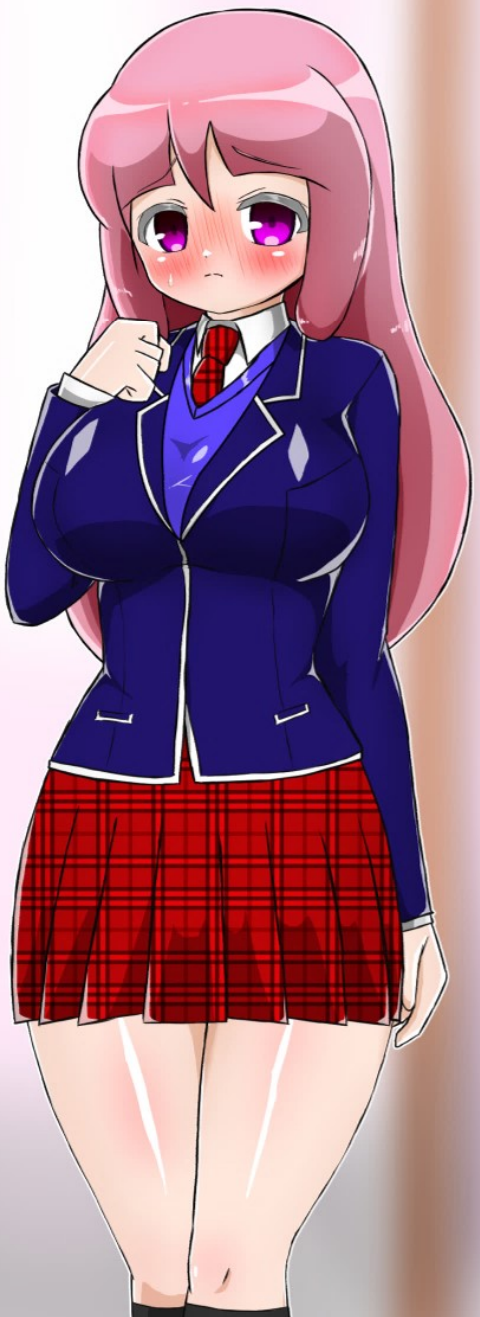
月	火	水
26	27	28
2	3	4
9	10	11
16	17	18
23	24	25
30	31	1



# 第5章 スーツの誘惑

「あ……」

家に帰り自室に向かうモモ。鏡の前に立ち制服から着替えようとするモモ。



しかし先程の疼きは治るところか増しており顔は赤らめたままだった。

「はあ、はあ……わたしどうしちゃったんだろう……。身体が熱い……」

鏡の前でモモは服を脱ぎ捨てシャツとパンツだけの恰好になる。

「はぁ、はぁ、はぁ」

脳裏に残る先程の出来事と媚薬入りドリンクやモニターの影響も残っている

「乳首……勃ってる……アソコも……ムズムズする……」



水	28
	4
	11
	18
	25
	1

「恥ずかしいけど……少しギリギリしようかな……」

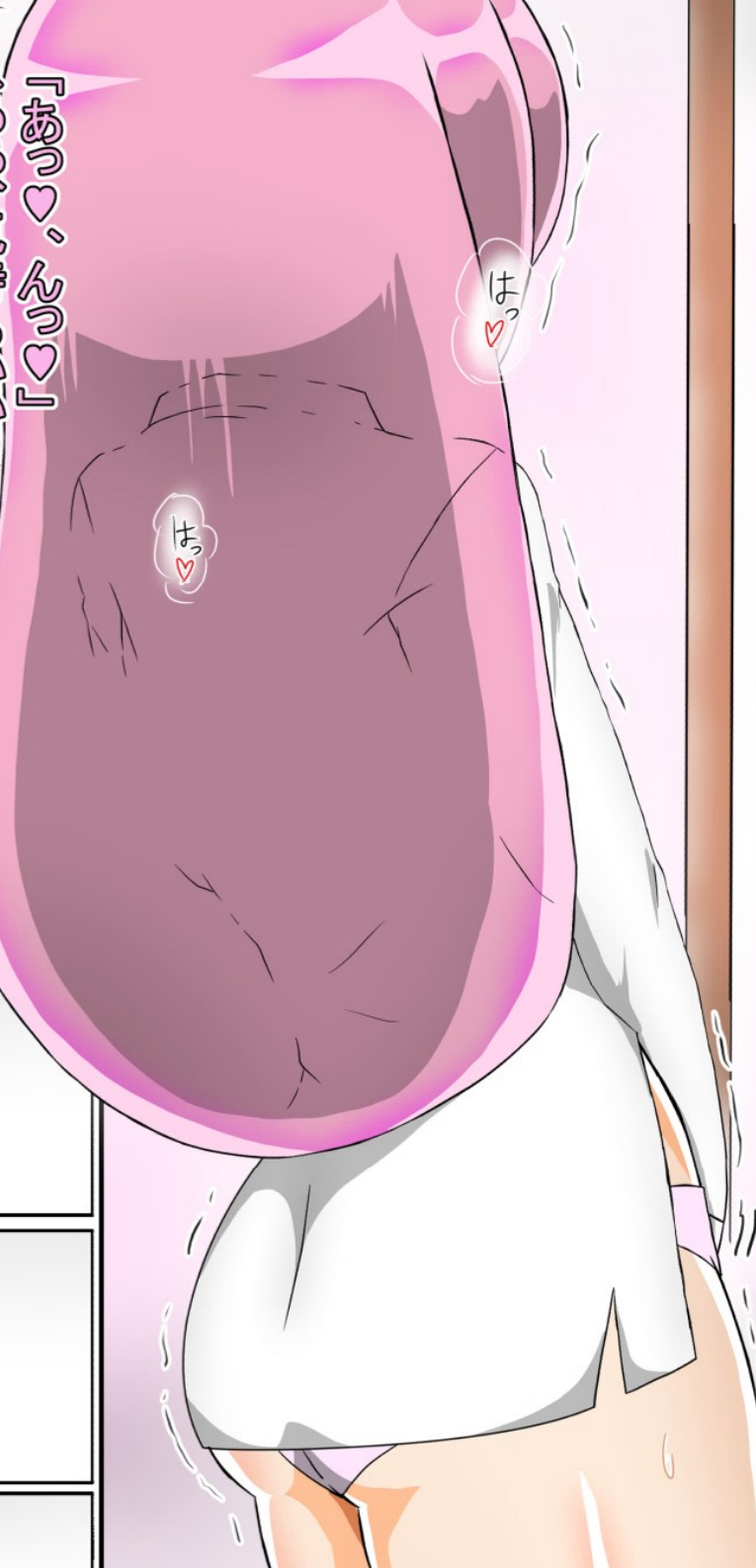
湧き上がる性欲と性感の疼きに耐えかね性感へと手を伸ばし始める。



「はっ、はっ、はっ♡」

「やっぱりオナニー……恥ずかしい……でも前にやったより気持ちいい♡」

性欲は高まった状態だが羞恥心により手の動きは何処かぎこちない。  
しかし先程責めを受けながらも発散させる事無く  
中断され性欲の高まった身体では  
抑える事は出来ず自慰を続けるモモ。



「あっ♡、んっ♡」

（ああ、気持ちいい♡）

さっきは途中でやめられちゃったから……♡  
先程の事を思い出し手の動きを速める。

「はっ、はっ♡、んっ♡」

（でもさっきはあの恥ずかしいスーツに締め付けられながらだったから  
もっと気持ち良かった♡）





第6章 洗脳催眠ディスク

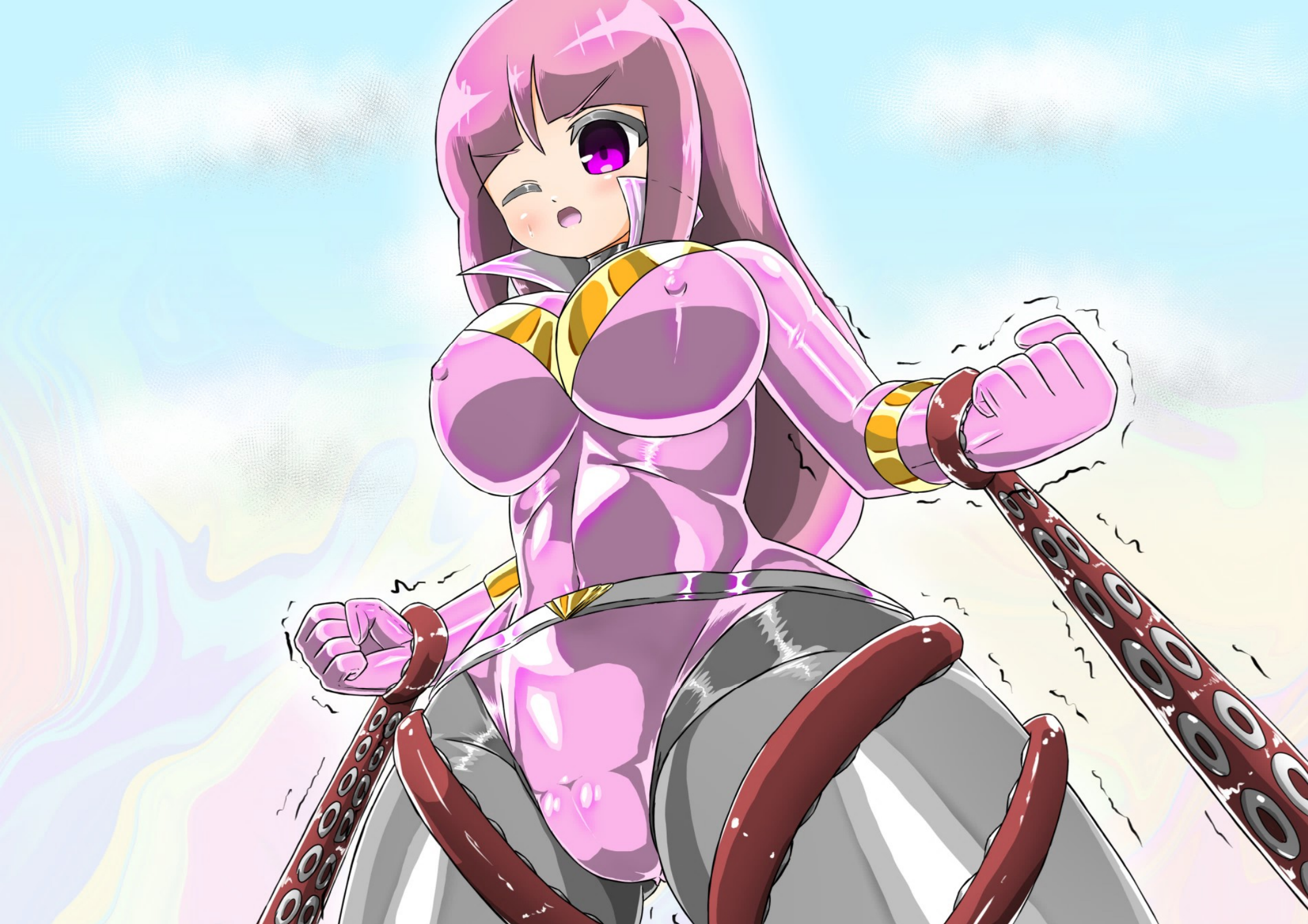


第7章 最下級戦闘員の戦い





第8章 桃の輝姫 ラステイピンク



《それでは訓練を開始して下さい。》

「はい……桜木モモ、訓練を開始します……んっ♡」

モモは流れる指示に従いスクワットを始め、腰を下ろすと股間部のスーツが食い込み今まで以上に強い締め付けが襲う。

「ぎゅっ、ぎゅっ、「れ……恥ずかしい……」

「こんなので気持ち良くなるなんて……」

締め付けによる強い刺激によりモモの希薄だった意識が少し目覚め自尊心を働かせ動きがぎこちなくなる。



第10章 再戦 オクトガイ











「よし、固定完了だ」

「んう。。。」

（わたしは。。。）

ビグルとの性行為を終え意識を失っていたモモだが目を覚ます。

「。。。は。。。？」

ぼんやりとした状態から徐々に

視界と意識がはつきりとしていき

自身の状況を確認しようとするモモ。

ガパン

「うう。。。動けない。。。」

手足を動かさそうとするが何かに拘束されており動けない。

「。。。これって。。。？」

意識を取り戻したモモは自身の状況を理解する。

「んは……」

辺りを見渡すと怪しげな機械や装置、モニターが設置されている。

「くく、気が付いた様だな……」

「この声はドクタービグル……」

「桜木モモ……いや、ラストイピンク。」

「先程の約束は覚えて居るな？」

ガキ



「約束……」  
（そうだ……わたしは……）

ビグル……

「ん……はっ、はっ……♡」

先程ビグルと取引をした事を思い出す。  
そしてモモにとって初めての性行為を行い、  
それを思い出し羞恥や屈辱を感じナノマシンが反応し刺激する。

「これから貴様は洗脳され我々の奴隷となるのだ！」

ピピピ...

キイイイン...

「はあ、はあ...♡...洗脳...♡」

「このままじゃわたし...悪の手先...なのじゃないって...  
身体が熱くて...わたし...興奮してるの...♡」

「まずはパルスバイブレーターを装着だ」

「んっっ！はっ、はっ♡」

ぷるる...

「~~~~~息が荒くなっているぞ。」

「我々に支配される事がそんなに楽しみなのか？この変態マツ娘が！」

「ナノマシンと催眠により性欲を高められたモモを責める為の装置が  
性感帯に装着され、その刺激に思わず声を上げるモモ。」

「そんなモモに羞恥や屈辱を引き出す様に罵声を浴びせるビグル。」

ピピピ...

「んっ...♡」

「こんな状況なのに何で...♡」